移民社会とキリスト教

——美山貫一のハワイ日本人移民伝道——

吉田亮

はじめに
一　伝播者と受容者の性格
(一)　伝播者——美山貫一の半生
生いたち
受洗
福音会の設立
(二)　受容者——初期のハワイ日本人移民社会の動向
日本人移民の境遇
安藤太郎の姿勢
H・E・Aの姿勢
二　美山によるハワイ伝道の展開
(一)　第一回ハワイ渡航の経緯
(二)　日本人共済会の設立
(三)　日本人Y・M・C・Aの設立
(四)　美山の伝道事業とその反響
三　美山によるハワイ伝道の成果
(一)　第二回ハワイ渡航の経緯

(二) 日本人禁酒会の設立
(三) リバイバルと日本人教会の設立
むすび

はじめに

本稿は、日本人キリスト者によるハワイ日本人移民伝道の発端を明らかにすることを通して、キリスト教の初期日本人移民社会に及ぼした影響及びその意義を特に伝播者の伝道活動に焦点をあてて究明しようとするものである。

周知のように、日本人移民へのキリスト教伝道は、一八八五年に第一回「官約」移民が到着してまもなく、ハワイアン・ボード（The Board of the Hawaiian Evangelical Association 以下H・E・Aと略す）のC・M・ハイド（Charles McEwen Hyde）やF・W・デーモン（Frank W. Damon）たちによって開始されたが、あまり成果をあげることができなかった。[1] そうした時期に、美山貫一が、サンフランシスコのメソジスト・エピスコパル（以下M・Eと略す）教会の日本人信徒を代表してハワイに到着し、日本人移民へのキリスト教伝道を開始した。美山は、初期の日本人移民社会のなかで、慈善・矯風事業及び福音宣教において画期的な成果をあげた。

さて、美山貫一のキリスト教伝道に対する従来の評価は、ひじょうに高いものがある。たとえば、『ハワイ日本人移民史』（布哇日系連合協会、一九六四）では、美山の記述のために七ページも割き、その業績を詳しく紹介し「ハワイ滞在は一カ年と九カ月に過ぎないが、この間に、移民を慰撫し、禁酒、貯蓄、入信に導き、労働者の救済と、安全勤労、発展に寄与した功績は、前後に比を見られない大きなものであった」[2] と日本人の初期移民社会への貢献を高く評価する。また、美山の福音宣教についても「ことにキリスト教の場合は、はじめは日本人の中では、移民のほとんど

全部が仏教系統で、とくに一向宗が多く、ヤソ嫌いがとおり相場であった。このため異端的立場におかれて、いろいろ集団的圧迫や侮辱を受けたことも少なくなかった。こうした不利と困難のうちで、美山牧師が官約初期の移民を多数教化し、洗礼を受けさせたことは、まったく驚異に価するものであった」[3]とし、まさに、日本人による日本人移民伝道のパイオニアとしての彼の功績を高く評価している。しかし、従来の美山に対する評価では、美山のキリスト教伝道が日本人移民社会の精神的風土性に及ぼした影響、及びハワイの支配文化であるアメリカ文化への適応（アメリカナイゼーション）に及ぼした影響については十分検討されていない。[4] ところが、キリスト教の伝道は、一般的に、単に福音の拡散、伝達のみをおこなうのではなく、諸種の文化的活動を通じて、キリスト教が形成された地盤としての西洋文化、ひいてはアメリカ文化をも伝え、それによって、相手の社会、文化過程、更には精神構造に変化を与えると同時に、自らも何等かの変化を余儀なくされるという社会的機能を有している。そこで、本稿では、美山のキリスト教伝道（主に一八八七―一八八八年）と初期日本人移民社会との関係を見ていく際に、彼の伝道形態及び内実を分析しつつ、それが日本人移民社会、文化過程、そしてそれを支える精神構造にどのような変化を与え、結果として日本人移民社会、その精神的風土性、及びそのアメリカナイゼーションにどのような影響を与えたのかという問題に焦点をあてて検討していきたい。

それらを検討するに当たって、まず、キリスト教の伝播者である美山の伝道の性格、受容者である初期の日本人移民社会の動向及び美山の伝道事業に大きな影響を及ぼす安藤太郎総領事及びH・E・A活動を明らかにし、次に、美山のハワイ渡航の経緯、安藤太郎及びH・E・Aとの関係などを通して、彼がハワイでおこなった慈善・矯風事業・福音宣教の内容を検討し、最後に、美山のキリスト教伝道の初期日本人移民社会における意義をまとめたい。

尚、従来美山のハワイ伝道を考察する資料としては、今泉源吉『先駆九十年　美山貫一と其時代』（みくに社、一九四二、以下『其時代』と略す）、永田基『安藤太郎文集』（日本国民禁酒同盟、一九二九）、奥村多喜衛『布哇伝道三十年略史』（一九一七）、川添樫風『移植樹の花開く』（同刊行会、一九六〇）、*Harris Memorial Methodist Church 75th Anniversary* (1963) などが用いられてきたが、本稿では、国内及びハワイの調査で得られたいくつかの新しい資料を補いつつ、再検討していきたい。主な資料は次のとおりである。

安藤太郎述『在布哇日本人禁酒会概況』（日本禁酒会、一八九〇）、安藤記念教会編『安藤太郎氏昇天記念』（一九二四）、小室篤次『メソデイスト布哇開教三十五年』（一九二三）、安藤太郎の「日記」（安藤記念教会所蔵）、外務省外交史料館所蔵「本邦移民布哇渡航一件」その他、『七一雑報』、『福音新報』、『東京毎週新報』、『基督教新聞』、などの日本側資料ならびに "Annual Report of the Hawaiian Evangelical Association," "Missionary Herald," 'Letter and Report' (owned by the Hawaiian Mission Children's Society Library), Harold Winfield Kent, "Dr. Hyde and Mr. Stevenson" (Charles E. Tuttle Company, 1973). "Daily Bulletin," "The Gospel in All Lands", "Annual Report of the Mission Society of the Methodist Episcopal Church."

一　伝播者と受容者の性格

(一)　伝播者――美山貫一の半生

生いたち

美山は、一八四七（弘化四）年一〇月二五日、長門の国萩の川島に、当時毛利家の家来であった父内藤博輔、母カヤの長男として生まれる。[5] 幼名を内藤正二郎または政次郎といった。桂太郎とは竹馬の友であり、少年期に吉田松陰

に師事する桂の叔父中谷正亮より教えを受け、一八六一年、桂太郎とともに藩校の明倫館に入った。当時、明倫館は教学の第一義を「皇国の大義」の明弁にありとし、校内ではよく楠公祭があった。美山はここで村田蔵六より兵学、航海及び砲術を学んだ。一八六六年に、山口の兵学校に入るが、この時期は攘夷熱が盛んであり、美山もそのただなかにあって、〝尊皇愛国〟のために幕府と戦う。一八六七年一〇月、大政奉還となる。この頃、美山は三田尻の兵学校で英吉利航海術を学び、翌年には、長崎広運館洋学局に入り、ひき続き航海術を学ぶ。一八七〇年五月二五日、美山は家督を相続し、三山貫一と姓名を改めた。(6) 一八七一年四月、美山は、英学と英国航海学の研究のため上京し、最初、海軍兵学寮に入るつもりであったが、目的を達せられなかった。一八七二年六月三日、山口県出張所からの指令で、彼は十三等出仕で陸軍省築造局城堡課建築掛となるが、二年後に廃止になったために退職する。当時、官界はほとんど長州出身者が占めており、美山は山縣有朋、伊藤博文及び井上馨などと親交が深かったので、望めば栄達の好機をつかめたがそれを望まず、日本橋の呉服町に藤屋という店を出し、宮内省、陸軍省御用達となった。しかし、彼自身は商売に深く関係せず、もっぱら書生たちが店をとりしきり、一時期繁昌していたが、一年後に倒産してしまう。美山は、この機にアメリカ行きを決心し、一八七五年に出発する。美山が日本を出る時は、弟の安宅のほか数名の見送り者がいたのみであり、むしろ失敗者としての旅立ちであった。

美山は、青年期より、〝尊皇愛国〟の精神を養う環境に育ち、一方で、海外に出ることを夢見て、航海術の勉学を続けていたが、海軍兵学寮への入学に失敗することで、彼の夢はくだかれ、それ以後は、栄達を断念し、失意のもとに暮らす毎日であった。そうした矢先に起った倒産は、美山を海外渡航にかりたてる大きな契機になった。

受洗

一八七五年八月五日、美山はサンフランシスコに到着し、スクールボーイとして働いていた。こうした時期に、美山はキリスト教と出会い、回心するのであった。美山はその頃、英文の宗教雑誌を読んでいたが、その中に'Be ye holy; for I am holy'という一節があった。彼はその一節の"holy"ということばが脳裏にこびりついて離れなかった。[7] そこで、たまたま日本で面識があったカナダ・メソジストの宣教師ジョージ・カクラン[8] (George Cochran)に知人を通じて手紙を出し、サンフランシスコのどこかの牧師への紹介状を書いてもらうことにした。カクランは、当時ハワード街のM・E教会の牧師トーマス・ガード(Thomas Guard)を紹介し、彼はガードを通じて、サンフランシスコM・Eミッションの中国人伝道部長オーチス・ギブソン(Otis Gibson)と出会う。ギブソンは思慮深く大胆で、神と良心の外には何物をも恐れない人物で、[9] 国家的精神に富み、日本を高く評価していた。美山は、彼の人格的影響により、礼拝に出席するようになった。

美山は、すでに、海軍兵学寮の志望を断念した頃、失望のあまり毎日ヤケ酒を飲んでいたが、或る時、彼の友人が枕元に置いていった「我は『彼』なり」というキリスト教トラクトを読み、その教えの偉大さを感じていた。一方、〝皇国〟のためという純粋な日本魂をもっていた彼にとって、維新後、形は改まっても、日本人の心は旧態依然のままであることは耐えられないことであった。[10] それゆえ、彼は〝聖〟なるものへのあこがれを強くもっていくのである。こうして、彼はギブソンの感化によって回心し、ギブソンより受洗するのである。美山は十字架の死の秘義を、「古い罪の自分は潔く死ぬ事だ腹を切るのだなあ」と解釈したという。[11] 劇的な回心の場面は次のようであった。[12]

The Dr. called me to his room one night after school and asked : 'Do you think you are converted?' 'Yes!' 'Do you know that your sins are forgiven?' 'Yes'. 'Do you love Christ?' 'Yes'. 'Do you want to lead others to Christ?' 'Yes'. 'Will you give your whole life to Christ?' This last question overwhelmed me with a sense of the burden. I felt crushed. I stood five or six minutes to consider while he sat studying my face. My head went down lower and lower. I saw that the Lord had cornered me; that I must meet the question squarely; that I could not and must not deceive my beloved teacher. Gathering all my courage I replied, 'Yes, I will give my whole life to him. Then, with tears streaming down his cheeks he extended to me his hand and said, 'Now let us pray.' And he did pray. (sic) That settled the case forever as to my allegiance to Jesus Christ. From that moment all my burdens rolled away, and have never troubled me since.

こうして、美山は、一八七七年二月二二日に受洗した。美山の受洗は、彼の強い〝尊皇愛国〟の精神とギブソンの人格及びその国家的精神からの感化をベースにしたものであったといえよう。

福音会（Gospel Society）の設立

美山がサンフランシスコに渡って来た頃、そこには七〇人位の日本人が住んでおり、その大半は苦学生であった。そのうちの吉田勝、橘成実、西巻豊佐久たちは、リンコルン・ハイスクールの校長ウィルソン博士の知遇を受け、パウェル街の会衆派教会に出席するようになる。また、彼らは同教会婦人伝道会の人々より聖書研究と英語の教授をうけるようになった。ウィルソン夫人は、婦人会に計り、日本人書生のために、毎月二ドル五〇セントの補助を得、残り五〇セントを日本人書生の方から工面させるようにし、中国人伝道館地下室の第一五号室を月三ドルで借り入れた。[13] 美山もこの集会に出入りした。ギブソンは日本人書生を日曜礼拝に招いたり、毎土曜日に聖書講義をおこなったりし、その成果として彼らのうちより少しずつ受洗者も出るようになった。

こうして、一八七七年一〇月六日に、美山が主唱し、小谷野景造、西巻、二宮安次らがそれに応じて、アメリカにおける最初の日本人のキリスト教団体である福音会が設立された。[14] 会則は次のようであった。

名称　福音会と称す
集会　毎土曜夜集会を開き聖書の講義及演説をなす事
会費　会員は会費を二十五仙とし毎月最後の土曜日に徴収する事
役員　会長、会計、書記、各一名を置き事務を執る事
総会　年二回総会を開き諸般の報告及役員を選挙する事

福音会は、いかなる教派にも関係しない独立の日本人団体であり、その目的は「主なる耶蘇基督の愛心を体認し其訓誨を服膺して人を導き衍罪を免れて無窮の福地に入らして主の栄を揚る」というキリスト者の務めにのっとり、サンフランシスコに住む同胞の間にはびこる「悪俗を除去」するために「耶蘇聖教」によって「渠等の内に自ら省みて廉恥の心を起すべきの路を開くにあり」というものであった。[15] 具体的には、キリスト教を通じて、矯風事業、慈善事業、英語の夜学校のほか、新渡米者の世話、寄宿舎、職業紹介など、さまざまな機能をもち、福音会の事業はひじょうに大きな成果をあげた。[16]

福音会が、黎明期の日本人社会に大きな貢献をした理由は、何よりも会員が「我が日本人民の義務を尽さんと欲する赤心」より発足し、一身を神に捧げ国のために尽し大東の国威を穢さぬようにという強い愛国心と、倫理的実践に裏打ちされたキリスト教信仰に支えられ、多様な事業を通じて初期の日本人社会の要求に応え、また彼らをリードしていくだけのイニシアティブをもっていたからである。[17]

第一期の会長は小谷野であり、美山は書記であったが、実質的には美山が会長代理であり、彼の福音会への影響力

はまさにカリスマ的であった。

しかし、福音会はその後、意見のくい違い、アメリカの教派の影響により、一八八一年に分裂し、[18] タイラー福音会（長老派）が発足し、残留者は、美山を会長としてM・Eミッションの中国人伝道部に属することになる。一八八三年には、第二回目の分裂が起こり、ステヴンソン福音会が発足し、二年後には、タイラーとステヴンソン両福音会は合併し、第一日本人長老教会が発足する。一方、美山の属するM・E系福音会は、一八八六年九月に、M・Eのカリフォルニア・コンフェレンスで日本人メソジスト・ミッションとして承認され、同一二月に、M・C・ハリスが監理（Superintendent）、美山が副監理（Assistant Superintendent）になった。

その間、美山は、一八八四年に帰国し、各地で熱心に禁酒演説をする一方、翌年三月二七日に、京橋区築地明石町メソジスト会堂で、美以美福音会を発足させ、夜学で英語を教え、渡米の便宜をはかった。[19] また、同一一月に、彼は青山豊と結婚し、[20] 翌年三月に、再び夫婦でサンフランシスコにもどった。

このように、伝播者である美山のキリスト教伝道は、青年期より培われてきた〝尊皇愛国〟の精神をより純化させるキリスト教信仰を基調とし、伝道形態としては、同胞愛と同胞への義務という強い使命感にたって、日本人移民に国家的精神の鼓舞と、同胞救済及び厳格な倫理的実践を強調するという性格をもっていた。美山の伝道の原型は、福音会の事業の中に如実にみられる。福音会は、強烈な愛国心と同胞愛によって支えられており、単に福音宣教のみを目的にしているのではなく、慈善事業、矯風事業、教育事業などさまざまな形態をとり、初期の日本人移民社会に貢献するとともに、福音会の構成メンバーの主要部分が書生であったということも作用して、アメリカ文化を日本人社会にもちこむ役割をも果たした。そのことは、福音会より多くの当地の大学入学者及び在米日本人の指導者を生み出

していること、また、当初アメリカの教派と関係しない独立した団体であった福音会が、教派の介入によって分裂していったことからも伺われる。しかし、アメリカの文化をとり入れるといっても、それはあくまで国家的精神を前提にしており、日本人の主体性を高め、国威を発揚するためであり、まさに〝和魂洋才〟ともいうべきものであった。

こうした福音会の伝道形態は、日本にまで波及し、美以美福音会の設立となるばかりでなく、このエネルギーは、ハワイにまで波及し、そこの日本人移民社会のなかでより成熟した展開をみせることになる。

(二) 受容者——初期のハワイ日本人移民社会の動向

日本人移民の境遇

周知のように、一八八五年二月八日の九四六人（九四四人の説あり）を皮切りに、「官約」移民はぞくぞくハワイに渡っていった。移民の大部分は、山口、広島を中心とする農民によって占められており、日本で食いつめ、窮乏のはてにハワイに活路を見いださんと三年契約の出稼ぎ移民として渡ってきた。しかし、いざハワイに来てみると、彼らは農作業には慣れていたであろうが、炎天下の不慣れな労働（大部分はサトウキビ栽培）、言語の不通、契約不履行、ルナ（現場監督、大半はポルトガル人）よりの虐待、病人の拘留などにより、耕地の雇主とのトラブルが絶えなかった。こうした不条理に対して、耕地労働者がストライキをおこすと、いやおうなく罰金や入牢刑を強いられた。また、こうした不平不満の上に、荒涼とした耕地には移民たちの荒んだ気持ちを慰めるようなものはなにもなかったから、日常生活は乱れる一方であった。そのため、日本人移民社会には、飲酒、博奕、売淫がはびこり、怠惰、放逸の風習に

おぼれ、それによって体をこわして病気になったり、日本に送る金を使い果たしてしまう移民が続出するというように、さまざまな問題がでてきた。[21]

その結果、日本外務省は、移民の権益を守り、雇主との紛争を未然に防ぐために、一八八六年一月二九日に、日布渡航条約を批准した。[22] これによって、移民のために、無賃渡航、通訳者の雇入れ、医師の雇入れなどの便宜がはかられた。しかし、移民たちの動揺と不行跡はそれほど改善されなかった。

一方、生活面では、移民たちは、農民によって占められ、一日中苛酷な耕地労働に従事し、雇主のハオレ（白人）から虐待されていたということもあって、英語を学ぶ機会、ハワイの文化と接触する機会はなかった。また、彼らは三年契約の出稼ぎ移民がほとんどであり、ハワイに定住する意志がなかったので、それらを積極的に受け入れる必要もなかったといえよう。それゆえ、日本人移民社会は、日本の農村社会の延長線上にあり、その伝統的精神風土をそのまま持ち込み、何ら他から新しい刺激を受けることはなかった。そのことにつき、H・E・Aの宣教師のF・W・デーモンは、日本人移民が働いている各耕地を巡回した後で、次のように報告している。[23]

It is almost as if a section of the rural life of Japan had been magically transported across the ocean. These people have come but very little, if at all, in contact with foreigners, up to the present time there has been but comparatively little missionary effort in their part of Japan, if I am correctly informed. Hence we have a large number of this most interesting people who are to receive their first immigrations of Occidental life, customes and manners, and, most important of all, the first presentation of Christianity from us.

このように、日本人の移民社会は、圧倒的なアメリカ文化の中に移入されてきたとはいうものの、何ら相互的な接触はなされなかった。

安藤太郎の姿勢

一八八六年二月一四日、安藤は日布渡航条約の締結のため、ハワイの総領事としてホノルルに赴任した。安藤は赴任のいきさつについて次のように述べる。[24]

扨て同年間に二回程渡航が開けて移民が凡そ三千人近くになつた処が、外国慣れないのと種々なる事情の下に日本人が多くは懶怠放逸に流れ、飲酒博奕に耽けるので内外人の間に苦情が起り、当時在留の領事も其始末に困却し、遂に呼返された。然るに余は其頃上海領事館に居つたが、急に右移民取締の為に、布哇国へ転勤を命ぜられた。……余は上海より転任するのは、頗ぶる不快に感じたけれども……余儀なく赴任した次第である。扨て赴任して見ると、三千人といふ外国不案内の労働者の事故之れが処分方の容易ならざる事は申す迄もないのに、日本人は益々懶怠放逸に陥り、而して外人は待遇愈よ苛酷に渉り、如何ともする能はず、果ては余が自身の進退をも決せんとする場合に迄切迫した。

安藤は、いやいやながらハワイに赴任したのであったが、着いてみると移民の境遇は悲惨さを極め、移民対策上やるべき問題は山積していた。それは、矯風事業、救済事業、労働者の慰撫抑制、ストライキの調停、貯蓄の奨励などであった。彼は外務大臣大隈重信宛の報告の中で、荒廃した移民社会の改善のために遠方のものには布達を発し、近隣には訓誨をおこなうなどして、そのためにほぼ二年間にわたって尽力するが、[25]「顧テ其実況ヲ往時ニ比スルニ醜行ハ愈増長スルノ勢アルモ更ニ減却ノ状アルヲ不見策尽キ力究リ殆ト百事断念セントスル」というように、まったく効果があがらなかったことを述べている。[26]

このように、安藤はハワイの日本人移民対策のため赴任したのであったが、その目的をまったく達することもなく、困却状態にあった。

H・E・Aの姿勢

既述したように、一八八五年二月八日、第一回「官約」移民が到着するとすぐ、C・M・ハイド、F・W・デーモンなどによって、日本人移民への伝道は開始された。彼らの伝道は、福音宣教にとどまらず、教育活動を併行しておこなうことによってアメリカ文化の啓蒙をも兼ねる機能を有していた。また彼らの伝道に対して、青木[27]、安藤太郎、安藤辰一などが通訳として協力した。安藤太郎は、特に熱心に彼らの伝道に協力し、毎日曜日の礼拝に出席する他、多くの日本人を彼らの伝道事業に参加するよう勧誘したりして努力している。しかし、彼は、専ら〝耶蘇嫌い〟であり、外交上余儀なく彼らに協力したのであって、彼らの説教を聞いて感動するようなことは、まったくなかった。[28]

H・E・Aによる伝道事業は、彼らの努力にもかかわらず、たいして振わなかった。安藤太郎はそのことにつき、外務省報告で次のように述べている。[29]

先是「ホノルヽ」府ニ於テ米宣教師等数名我邦人ニ福音伝説ノ為日本人基督青年会〔後の日本人Y・M・C・A――吉田〕ナル者ヲ設立セン事ヲ企テ之ヲ太郎ニ謀ル太郎固リ異議ナキヲ以テ其挙ヲ賛成シ毎安息日ニハ領事館挙テ会堂ニ臨席其説教ヲ聴聞シ以テ移住民等ノ誘導スルニ勉力スル殆ト七八ケ月ニ及フト雖トモ説教皆通訳ニ出テ解釈甚迂遠ナルヲ以テ会員常ニ稀少ニシテ或ハ中絶ニ至ラントスルノ状況ナリシニ……

このように、H・E・Aが日本人移民に伝えたキリスト教は、日本人に理解されなかったのである。その理由はいろいろ考えられるが、重要なものは、まず、言語の障害である。当時の移民はほとんどが農民で、日本で十分な教育をうけておらず、しかも、出稼ぎ移民で定住の意志が稀薄であったので、英語を学ぶこともなかった。

一方、宣教師は、日本語がわからないし、学ぶこともせずもっぱら通訳に頼っていたから、日本人移民と十分なコミュニケーションがもてなかった。[30] 次に、文化的距離である。既述したように、日本人移民社会は、日本の農村社会の伝統的文化をそのまま踏襲しており、アメリカの文化やキリスト教を受け入れる素地はなかった。むしろ、ハワイを支配する白人に対して、日頃からやり場のない憤りをもつ日本人移民にとって、アメリカの文化などまったく迂遠なものであった。更に、H・E・Aの日本人移民伝道への比重である。[31] 彼らの伝道勢力は、当然のことながらハワイ原住民に向いており、日本人への伝道にそれほど大きな人員と資金を割かなかった。また、伝道方法としても、おもにホノルルの有識階層を対象として、日本人移民のもちこんだ文化に対する何らの配慮もなく、一方的に、しかも通訳者を使って間接的にアメリカ文化の啓蒙をおこなった。その際、彼らの伝道事業はほとんど安藤たちの協力に依存しており、彼ら自身が日本人移民の中にはいっていって福音を伝える努力をしていない。ましてや、ホノルル以外の耕地で働く大半の日本人移民の耳には、キリスト教のキの字すら伝えられていなかった。

このように、H・E・Aのおこなった日本人移民伝道は、たしかにハワイの日本人伝道の端緒であり、美山の伝道の布石となった点では重要な意味がある。しかし、彼らが伝えたキリスト教が、日本人移民の精神構造のなかにどれだけ浸透したのかという点では、まったくしなかったといってもいいすぎではあるまい。

このように、受容者である初期の日本人移民社会の動向は、移民社会が荒廃し、安藤総領事すら手のつけられない状態であり、一方、H・E・Aのキリスト教伝道は、低迷状態にあった。また、生活面では、日本の農村社会そのものであり、アメリカ文化のただなかにあったとはいえ、日本人移民社会は文化的には〝鎖国〟状態であり、かすかにH・E・Aを通じて、キリスト教、アメリカ文化がはいってくる余地はあったが、それも既述したように、望めない

ものであった。

二　美山によるハワイ伝道の展開

(一)　第一回ハワイ渡航の経緯

美山は、ハワイ伝道のために二回ハワイに渡っている。[32] そのうちの第一回目は、一八八七年九月三〇日に、ホノルルに到着する。美山は自らがハワイに渡航することになった理由について、次のように述べる。[33]

神戸で七一雑報とか、七一新報とか云ふ基督教の雑誌が出ていた。此雑誌が盛に布哇移民の惨状を書た。移民会社の暴横、罪なき移民が奴隷の如く使役されて苦んで居る事を天下に訴へた。故郷に音信したくも文字が無い。理窟を云へば酷い目に逢ふ。たゞ涙を呑んで苦役に従ふ様な有様であるといふので、盛に移住民救護の必要を説いた。同時に日本から来る多くの新聞を見ると、また例の移民虐待事件が載て居る。之を見た桑港教会の青年、血も有り涙も有る。神の為め人道の為め如何にかして此憐れな同胞を救い度い。せめて冷い水一杯でも飲ませたい。一通の手紙でも書いてやりたい。そこで此目的の為に特別祈祷会は開かれた。一夜一夜と祈り続ける中に到当誰か布哇に送らうといふ議が出た。其所で誰彼れと人選をする内に美山牧師が其選に当つた。

美山は、サンフランシスコで『七一雑報』を読んでハワイの日本人移民の惨状を知ったと、上記のもの及び『其時代』二〇九ページでも述べているが、残念ながら、『七一雑報』のなかにはそのたぐいの記事は見当たらない。おそらく、彼の記憶違いであろうが、ともかくサンフランシスコの日本人信徒たちは、同胞愛にかりたてられ、ハワイの同胞のために役立ちたい、彼らを何とか救ってやりたいという一心で、一八八七年九月二三日に、日本人信徒を代表して美山をハワイに派遣した。その費用は、当地の貧しい苦学生たちの寄付によって調達され、不足分は一八日の送別会の際の義捐金によった。[34]

こうして、美山は何らの教派的背景をもたず、ただサンフランシスコの日本人信徒の同胞愛と、切なる祈りに支えられ、単身ハワイに向かった。[35] 美山の回顧では、この時点では「基督教を移住民に伝へると云ふよりも、国家的精神が本位で我が同胞が虐待されているときいて憤慨に堪えなかつたからでした」と、その動機を率直に述べている。[36]

九月三〇日、美山はホノルルに到着し、その日に安藤太郎総領事と会ったが、特別な紹介状がないから「ごろつき並」に扱われたという。[37] たまたま、副領事鳥居忠文がクリスチャンであり、安藤に口添えしてくれたので、ようやく安藤も力を入れてくれるようになった。

美山は、安藤の協力により、一〇月三日、クィーン・エンマ・ホールでハワイ最初のキリスト教の説教をおこなった。聴衆は、安藤を中心に領事館関係者が大半で、わずか二四〜五名であった。[38] その時の説教は、世の終わりの審判に関するもので、最後に美山は涙を流しながら、次のように訴えた。[39]

おゝ兄弟よ、どうか御互に日本人であることを光栄とし、その体面を保つためにはどんな辛抱でもしようぢやありませんか。お互が怠けたり不品行したりすれば、自分が一文なしになつて困るばかりでなく、万世一系の我国体を傷けその汚名は実に同胞三千万の頭上に繋るのですから、一つ奮発して明日から生れ代つて頂きたい。

この説教に、安藤夫妻はひじょうに感動し、翌日、「神の愛、基督の救霊の恵」などについて説教してもらうため、美山を自宅に呼んだ。[40] H・E・Aの宣教師の説教ではわからなかった福音の意味が「美山氏一タヒ同会ニ出席セショリ人々始テ福音ノ何物タルヲ通暁セルカ如ク爾来集会スル者漸ク接踵スルニ至リタリ」というように、日本人に伝わるようになった。[41]

それ以後、美山と安藤との関係は親密になっていき、移民対策の話しに進んでいく。

一方、H・E・Aの方は、美山に対してどのような姿勢をとったのだろうか。彼らも美山を歓迎し、ハイド、デーモンたちは、美山の伝道に協力する姿勢であった。[42] その理由は、何よりも美山がM・Eミッションより派遣されてきたのではなかったからであり、[43] しかも、彼は現役の牧師であるから、彼によって日本人移民伝道の低迷を打開しようとハイドたちが目論んでいたからであった。

このように、美山の第一回ハワイ渡航は、熱烈な同胞愛によって支えられており、なんとかハワイで苦しむ同胞を救ってやりたいという一念であり、キリスト教伝道開始による教派的利益など念頭になかった。そのためもあってか、美山は幸運にも、安藤、H・E・A双方に快く受け入れられた。

(二) 日本人共済会 (Japanese Mutual Aid Association) の設立

安藤にとって、海外の窮民救済は、上海で領事をしていた頃よりの十数カ年来の課題であった。ハワイでは、すでに中山譲治移住民局長が、在留日本人中に救済会を起こすことを計画したが、失敗に終わっている。[44]

こうした時期に、美山は、安藤にサンフランシスコの福音会をモデルとしつつ、窮民救済の必要性を訴え「是等は凡て慈善的事業の方法によって一の団体を組織すれば、其実施案外容易なる次第を勧告」した。[45] そこで、安藤は職掌上よりその意見を採用し、さっそく日本人中の有志を集め、日本人共済会の設立を協議した。さしあたり、一〇月七日に、安藤ふみ子（総領事夫人）、中山きん子（移住民局長夫人）、岩井そめ子の連名で設立趣意書を同胞有志に送り、その賛助を求め、一〇月九日に、総領事館に有志が集まり創立が決定された。その設立趣意書は次のとおりである。[46]

当布哇国ニハ御国ノ人々数多出稼ニ参リ居候処其内是迄病気其外ノ不仕合ニテ難義致（ママ）居候人々御座候由度々聞及ヒ誠ニ御気ノ毒ノ

コト、常々申暮シ居候

承リ候ハハ当ホノル、ニハ外国人ノ内ニテ右様ノ難義ヲ救ヒ候為慈善会御坐候趣ニ付何卒御国人ノ為ニモ右ト同様ナル組合相立以後難義致候人々ヲイカ様ニカ救ヒ度存候間御志アル方々ニハ御力添被下一同之為御国慈善会相立候様致度右成就候時ニハ私共日頃ノ志願相届キ誠ニ有カタキ事ニ御坐候此段イク重ニモ願上候以上

明治二十年十月七日

御国慈善会発起者　岩井そめ子
中山きん子
安藤ふみ子

在ホノル、御国人皆々様

こうして、一〇月一〇日に、日本人共済会の創立式がおこなわれ、当日、日本人約百名、外国人十数名が参加した。日本人共済会は、会長安藤ふみ子、副会長中山きん子であり、婦人が活動の中心になっている。その目的は、趣意書にもある通り、窮民の慈善救済であり、一カ月二〇セントの掛金で、入会は自由であるが、会員になると病気の際の入院費、暫時の食料、葬式費などがもらえるというもので、まさに官民一体の組織的な移民救済機関である。

H・E・Aの"The Friend"一八八八年五月の報告では、会員が千二百名というから、短期間のうちに画期的な成果をあげたということができる。(47)

安藤は、外務省への報告のなかで、共済会の成果について、美山の「熱心ト有弁ヲ以テ善ク我邦人ヲ振起シ之ヲシテ賛成尽力セシムルニ非サルヨリハ決テ如此必要ニシテ且広大ナル慈善会ヲ如此迅速ニ創立整頓スルヲ不能得ヤ明ナリ」と、彼の能力を高く評価し、その要因は「敢テ一ニ氏カ才徳ニ由ルニ非スシテ全ク氏カ基督教ヲ尊信スルノ篤クシテ爾ノ隣人ヲ愛セヨノ聖誠ニ出タルヤ不俟論ナリ」(48)と、キリスト教嫌いの安藤でさえ、その価値を率直に認め、報

告している。

美山の立案した日本人共済会が、これほどまでに成果をあげた要因として、以下のものがあげられよう。まず、安藤が当初より移民の救済事業の方法について困却し、一時救助策を設けたが、公費がかさむので、何とか工夫して新しい人民共同救済の方法を設けねばならないと思案していた矢先に、美山がその計画をもちかけたことである。彼は人民共同救済の必要を移民に訴え、世論をもりあげる一方で、有志者の共同出資という、官金の支出を減らし政府の責任を民間に分担させるという新たな救済事業を立案したため、安藤たちの強力な援助を得ることができた。次に、この共済会は、当時ホノルルの外国人のうちにあった慈善会の制度をまねたこと（一八五二年六月に Stranger's Friend Society が設立される）。ホノルルの慈善会は、窮民救済事業で成果をあげていたので、こうした事業に慣れない日本人といえども、容易に日本人社会にその制度をとり入れることができた。更に、H・E・Aの協力があったこと。彼らは当初より美山に協力的であり、共済会設立についてはそのために寄付をし、[49] また運営に協力している。[50] 最後に、移民にとって、共済会への入会はさまざまなメリットがあった。すなわち不幸の際、共済を受ける特権がある外、帰国の際、下等船賃四五ドルのうち一〇ドルが割引きになり、しかも移住民局免状手数料一ドルをも免除になるというさまざまな特典があった。[51] そのため、移民たちはぞくぞく入会した。

日本人共済会の設立は、まさに美山の国家的精神に支えられた同胞愛に裏付けされたものであり、伝道形態において、サンフランシスコの福音会活動を原型にしつつ、ハワイの日本人移民社会という特殊な状況の中でその一機能をより発展させ、組織化させたものといえよう。

その後、日本人共済会は、一八八八年一一月一〇日から二六日まで開かれた第一回年会で、付属病院設立を決定

し、[52] 募金を開始した。[53] この病院は、今でもクアキニ病院として残っている。

(三) 日本人Y・M・C・A (Japanese Young Men's Christian Association) の設立

日本人Y・M・C・Aは、一八八七年一〇月一三日に、H・E・Aのハイド、デーモン、及び美山が中心となって設立される。この組織は、以前よりデーモンらによって、クィーン・エンマ・ホールで続けられていた日本人のための諸集会活動が母胎になっている。設立時に、メンバーは四九人であり、会長C・M・ハイド、副会長F・W・デーモン、その他のスタッフはすべて日本人によって構成されていた。[54]

日本人Y・M・C・A設立の経緯について、安藤の外務省報告では、[55] ハワイ在住日本人移民の風俗壊乱は、官吏の干渉矯正では効果があがらず、また、ハワイでは、法律上こうした干渉を許さない場合が多いので困却していた時「近頃彼我有志之輩ノ団結為シ我邦人之為ニ日本青年基督教会 (Japanese Youngmen Christian Association) ト称スル一会ヲ創立シ専ラ敬神愛国ヲ以テ其品行ヲ矯正シ旁ラ英学ヲ教授セン事ヲ企図候旨申出候ニ付篤ト其趣意方法取調候処宗教之是非ハ暫ク措キ今日ノ如キ風俗壊乱ノ我下等賤民ニハ至極有益ナル事業」であるので奨励し、設立の許可を与えたと報じている。

こうして設立された日本人Y・M・C・Aの内容をみてみよう。まず、その目的は、上記のように、〝敬神愛国〟による矯風を目指しており、具体的には、日本人が外国人に愛され、尊敬されるようになるために、彼らに徳と学識をもたせ、知的、道徳的な教育を通じて日本人を矯正させようとするものであった。[56] 組織は、ホノルルY・M・C・A(一八六九年設立)を真似てつくられたが、日本人の国民性や習慣に最も有効に役立つように、その機構を修正すること

とが自由にできた。また、それには宗教、教育、経理、社会及び文芸の四部門の常任委員会があり、毎週各部門でさまざまな催し物がなされた。[57]

しかし、この組織はホノルルのクィーン・エンマ・ホールを拠点にし、安藤の協力を得つつ、主として有識階層を対象にして運営されていたこともあって、あまりメンバーは増えていないようであり、[58] 特に大多数の出稼ぎ移民には、大して効果が上がらなかった。

日本人Y・M・C・Aの設立は、一部の限定された人々のみに寄与したとはいえ、初期の日本人移民社会にあって、何ら教育機関のないなかで大きな役割を果たした。それは、聖書や英語、その他さまざまな教養を身につけさせるだけでなく、娯楽サークルをも備える、まさに日本人のための総合的な文化啓蒙組織であり、日本人の知識向上、更にはアメリカ文化に接触していく上にも大きな役割をはたした。

美山は、この組織が催す事業に可能な限り協力している。[59] しかし、それほど積極的ではなかった。そのことは、美山がH・E・Aの伝道に協力しつつも、一線を画していたことを意味する。その原因は、まず、ハワイがH・E・Aすなわち会衆派のテリトリーであったこともあろうが、むしろ、強い国家的精神をもつ美山にとって、同胞への伝道に外国人の手助けをかりることは耐えがたい屈辱であったため、[60] H・E・Aが実質的な主導権をもつこの組織には深く関与しなかったものと考えられる。

このことは、美山の伝道内容に関係してくる。すなわち、外国人宣教師主導型ではなく、日本人への伝道は日本人が担うという考え方であり、その日本人が置かれた境遇に適した伝道をおこなうという考え方である。そうした考え方は、美山がおこなった各耕地巡回などによく表わされている。

(四) 美山の伝道事業とその反響

美山は、一八八七年一〇月一七日から、移民監査官福島武三の案内で、F・W・デーモンとともに約一カ月間にわたって、ハワイ島、マウイ島の耕地巡回[61]、また、一一月二二日から約一〇日間にわたってカワイ島の耕地巡回をおこなう。

美山は、各耕地で日本人移民のありさまを見、同胞愛にかられて禁酒の害や博奕の不可、男女の関係や貯蓄の必要を説いてまわった[62]。

私は信者になれとは云はなかつた。広島の者が多く一向宗が多いからヤソは受け入れません。御小削の代りにヤソは水を掛けるさうだから、お安い所で願ひたいと云ふ調子で、ヤソも一向宗の一種だと思つていました。

私に何故酒は悪いかときくので酒の恐ろしい結果を懇々と話しました。『何程御尤です』と解る。『約束しろ』と私が云ふ。『それよりも悪いのは博奕を盛んにすることだよ』と云ふと『ホントですか』ときく。昼は仕事に出るから夜集まつて問ふたり答へたりして、博奕の悲惨な結末を話してきかすと、びつくりする。『私どもの中に東京から玄人が来て金を巻き上げます』といろいろ実状を打ちあけて語りました。私が『やめろ』と云ふ。その約束だと云つてみんなが差し出した骰子が手のひらに一杯ありました。

美山の説教は、各地で大反響を呼んだ。彼の伝道事業を詳しく知るために、安藤の外務省報告を少し長いが引用する[63]。

美山貫一申者当地ニ渡来宣教ノ間我人民海外ニ在ツテ怠惰ニ流レ不行状相働キ候時ハ独リ一身ノ蓄財主義ニ相悖リ候耳ナラス遂ニハ御国体ヲモ毀傷シ延テ其汚名同胞三千有余万之頭上ニ相掛リ可申云々ノ要旨ヲ以テ反覆説諭相加ヘ候処在「ホノルヽ」我居留民中ニハ頗ル之カ為メ感動致候者有之ヤニ相見エ平生日曜ニ参会鄙官等ト同座聴経候位ニ相成候右ハ全ク美山ナル者ノ品行方正容止温雅ニシテ加フルニ天賦ノ能弁御座候ニ基因致候次第扨実効如此著明ニ御座候ヲ以テ此機ニ乗シ従来之宿志相達申度存シ中山監査

官共熟議ノ上群島各耕地巡回ノ義同人ニ委頼候処固ヨリ其志願有之趣ヲ以テ早速承諾致シ遂ニ「ハワイ」「マウイ」「カワイ」等ノ諸島ヲ巡遊宣教ノ間主トシテ博奕売淫等ノ醜風改良ニ関スル説諭相尽候処第一ニ各雇主ノ満足不一方又移住民等ニ至ツテハ同人之勧告ニ深ク感動候者不少ト相見ェ或ハ直ニ一大屋ヲ求メ日曜学校ヲ設立シ耕耘ノ余暇ニハ聴経習字等ニ従事スル地方モ有之候

こうして、美山がホノルルに帰って来た時には、彼は両手に一杯骰子と盃とを安藤に差し出したので、安藤は驚き、移民取締り上キリスト教伝道がひじょうに有効であることを確信するとともに、美山への信頼はより深まった。[64] 安藤の日記では、一一月一七日から、領事館で美山主催の集会が開かれ、館員全員が参加している。[65]

また、一二月一一日に、第四回「官約」移民一、四四七人がホノルルに到着した際には、安藤は、美山に移民説諭の説教をさせている。[66] ここでも、美山は移民に向かって「辛苦ニ耐ヘ労役ヲ勧メ以テ其蓄財ヲ謀」るために「飲酒ハ之ヲ制」し、「博奕ハ之ヲ禁」じ、女子は「貞操ヲ旨」とすることにより、「御国体ヲ汚シ遂ニハ恐多クモ我　聖上ノ御名」を傷つけることがないようにという訓話をおこなった。

美山は、一二月二〇日に、サンフランシスコに帰ったが、彼のハワイ渡航の第一の目的である、日本人移民の慰問、視察以上の大きなみやげをもって帰っていった。[67]

このように、美山は第一回ハワイ滞在の短い期間に、画期的な伝道成果をあげた。それは、日本人移民に対する慈善・矯風事業、更には勤労、貯蓄の奨励、雇主との不和の調停などである。また、H・E・Aがまだ手がけていない各耕地巡回を彼がおこない、大きな成果をあげたことはまさに画期的なことであった。こうした彼の成果は、もちろん安藤らの協力、H・E・Aの協力なしには考えられない。しかし、美山が彼らの協力をとりつけ、こうした成果に結びつけていったことは、まさに彼の伝道内容の中に秘められている。

美山の伝道形態は、福音会活動を原型としつつも、それをハワイの日本人移民社会という特殊な状況の中で、より効果的に、組織的に発展させたものであった。すなわち、彼は強烈な国家的精神と同胞愛に裏付けられた信仰に支えられ、ハワイの日本人移民に〝敬神尊皇愛国〟を説き、日本人としての主体性、愛国心を覚醒させる一方で、同胞救済と倫理的実践を説いた。これらは、慈善・矯風事業という具体的な形をとって、日本人移民社会に大きく貢献した。美山の伝道によって、日本人移民社会は大きく変わった。それは、まず、日本人移民の愛国心が覚醒され、日本人としての主体性、協調性が生まれ、またモラルが回復した。次に、矯風事業・慈善事業・文化啓蒙事業などのアメリカの諸制度を日本人社会にもちこみ、彼らの生活様式に変化を与えた。更に、日本人移民、特に各耕地で働く多くの日本人に、さまざまな事業を通じてはじめてキリスト教、アメリカ文化を伝え、一方、彼らもそれに関心をいだくようになった。もちろん、この点については、美山の第一回渡航は、主として日本人移民の待遇改善にあったから、彼がそれを積極的に伝えたというよりは、副産物として位置付ける方が適切である。最後に、美山の伝道はH・E・Aのそれとかなり違う。後者は、日本人Y・M・C・Aへの積極的な協力にも伺われるように、アメリカナイゼーションの性格をもつが、前者は、既述したように、あくまで日本人の主体性を伸張し、国威発揚を目的とするものであり、たとえそれに付随してアメリカ文化がはいってきても、それは〝和魂洋才〟であった。

こうして、〝敬神尊皇愛国〟を基軸にした美山の伝道は、大きな反響を呼び、第二回渡航への要因ともなった。

三　美山によるハワイ伝道の成果

(一)　第二回ハワイ渡航の経緯

美山は、一八八八年一二月に、サンフランシスコに帰るに際し、H・E・Aと日本人伝道の今後について打ち合わせをし、それのために、サンフランシスコにいる一人の宗教書籍行商人をハワイに送ることを約束して帰った。[68] 美山が帰って来て後、サンフランシスコの日本人信徒たちは、一八八九年一月八日、太平洋沿岸の各地及びハワイ諸島にいる日本人同胞に福音を伝えるために伝道会社を設立し、[69] その事業のために六〇ドル以上の金を集めた。[70] こうして、この伝道会社より第一号の伝道者として派遣されたのが、清水泰三であった。[71]

清水は、美山とH・E・Aとの約束に基づき、あくまでH・E・Aの委員会の指示の下に、六カ月間、ハワイの日本人移民に伝道事業をおこない、その費用は、セントラル・ユニオン教会より支払われることになっていた。[72] 彼は、二月七日に、ホノルルに到着し、クィーン・エンマ・ホールの二つの部屋を住居として、日本人伝道を開始した。安藤太郎の報告は、清水の伝道について、移民に「敬神愛国修身蓄財ノ主義」を演述し、その「言語極テ凡俗ヲ旨トシ妄ニ英漢両語ヲ不用又挙止謙遜」なため、悔悟する者が続出したと述べている。[73] 清水の伝道は、かなりの成果をおさめ、七月二八日まで各耕地を巡回した。

しかし、こうしている最中に、サンフランシスコに、ハワイ公使アーウィン（R. W. Irwin）及び安藤太郎、デーモンから手紙がM・Eミッションに届いた。それらは、美山のハワイ再渡航を催促するものであった。[74]

では、なぜ彼らは美山の再来を催促したのだろうか。まず、アーウィンと安藤は、前年の美山の活動を具さに見「深ク美山氏ノ技両（ママ）ニ服シ其将来人民ノ感化ニ必要ナルヲ悟リ」[75]、また、キリスト教が移民の風俗矯正、地位向上その他移民対策に効果があることを知り、更なる効果を期待して催促したのである。[76] また、デーモンは、彼もまた美山の影響力の大きさを実感し、日本人伝道をさらに推進していくために催促したのである。[77]

これに対して、サンフランシスコのM・Eミッションでは、[78] 美山がサンフランシスコの日本人伝道に任命されているので、彼がハワイにもどり、事業を遂行するためには、ミッションの宣教師をやめるか、ミッションより公認されて派遣されるかの二者択一の決定を要するので、判断に困惑していた。そこで、とりあえずM・C・ハリスがハワイに行って、H・E・Aと協議することが決定されたが、さまざまな理由でその決定は実現不可能となった。結局M・E・ミッションでは、充分な討議の末、美山夫妻と鵜飼猛[79]の派遣を決定し、三月一六日に、彼らはホノルルに到着した。

その際、美山はアーウィンの招待を受け、[80] しかもM・Eミッションのビショップ・フォーラー（Bishop Fowler）の委任状をもってやってきた。そこには'The Rev. Miyama to open a mission of the M. E. ch. in the Sandwich Islands for the Japanese'[81] と書いてあった。すなわち、美山はサンフランシスコのM・Eミッションの支部をハワイにつくるためにやってきたのであった。これを知って、ハイド、デーモンは憤慨し、[82] 彼に抗議した。[83] ハイドが一番恐れていた、H・E・Aのテリトリーであるハワイへの、他教派の侵害という事態が現実となったのである。この件については後述する。

このように、美山の第二回渡航では、日本人移民への慈善・矯風事業の推進の他に、M・Eミッションの代表として、ハワイにその支部をつくるという重大な使命をも有していたのであった。

(二) 日本人禁酒会（Japanese Temperance Society）の設立

美山は、三月一六日、ホノルルに到着してから、一七日、ヌアヌ街の借宅に移り、ここに共済会本部を移し、その

事務一切を鵜飼に担当させ、また、同じ場所で礼拝、祈祷会などを開いた。[84]

美山は、まず、去年に引き続き、慈善・矯風事業に着手し、それに対して安藤は「基督教徒ノ助ケニ依ラザレバ善ク不能為ヲ篤信スルガ故ニ美山氏ノ一行ニ対シ事伝道ニ関スル者ハ協力助勢ヲ怠」らなかった。[85] 一方、安藤は、農村部からの移民が多いハワイで矯風事業をおこなうには官吏が率先してそれをおこなうべきであると考え、当時欧米諸国で、またハワイにおいても盛んにおこなわれていた禁酒事業（一八八七年に Blue Ribbon Society 設立される）をはじめようと考えた。[86] そこで、安藤は美山と相談し、四月七日に、「在布日本人禁酒会」の発会式をおこなった。この禁酒会設立の直接的な契機となったのは、東京の婦人矯風会長矢島楫子の美山への感謝状である。[87]

禁酒会のスタッフは、会長安藤太郎、副会長伴新三郎、書記鵜飼猛、役員藤田敏郎、新国千代橘である。また、その内容は「大日本禁酒会趣意書」のなかによく表わされている。[88]

……飲酒が一身の害耳ならず妻子にも世間にも悪事たりと知らば身の為人の為め辛抱を極めて禁ぜざるべからざるなり況んや加減の出来る人物に於てをや此辛抱一たび行はれて酒飲連中挙て禁酒する時は人々壮健にして各其業を務め夫より次第に富国強兵の基も相立ち遂には我日本をして世界万国の標準たるべき国柄と為すも決て難きに非ざるべし即ち此等を指して事小と雖ども大に喩ふ可きとは可謂ならん時としては新川に下戸の建たる倉はなしなど法外千万なる俗言あれとも誠に思へ此倉の為に幾万人の生霊が貴重なる生命を抛ち家屋を傾け妻子を路頭に迷はせ世間に害毒を流したるや不可知放蕩無頼の書生連中が妄に愛国と呼び尽忠と唱ふるよりも一文字を不知一匹夫か喉三寸の愉快を辛抱して禁酒する方遥かに愛国の道に協ふと可謂此等の道理より我々には茲に日本人禁酒会を創立し其利益を一身に止めずして之を他人に及ぼし以て愛国の微衷を達せんとする者なれば有志の人々には何卒猶予なく加入あらん事を希望するなり

つまり、矯風事業の一環として、愛国のために禁酒をおこなうというものである。

こうしてはじめられた禁酒会の運営は、「大日本禁酒会規則」[89]に基づいておこなわれ、毎月、禁酒のための奨励会

を一～二回開き、また、他の島々に対しては、趣意書を印刷して各耕地の移民に分配するとともに、各地の宣教師や所在吏員の協力を求めて移民に勧告をしてもらった。すると、当初三〇名程であった会員が、一〇カ月後には二千名という盛況を示した。

その結果、禁酒を実行する所では博奕の害がなくなり、領事館への貯金は急増した。また、禁酒会の成果を知った各耕地の雇主は、禁酒会員でなければ雇傭しないという有りさまとなり、その頃になると、移民の間で、禁酒会の徽章を胸につけていない者は「彼等ノ間互ニ恥辱トスルノ傾向」まででてきたと、安藤は外務省報告で述べている。(90)

禁酒会が、こうした成果をあげたのは、まず、ハワイ政府が、飲酒制限のために課税するという程、禁酒を奨励していた上に、当時、ハワイでは、宣教師たちが中心となって禁酒を組織的におこなっていたという外的要因がある。次に、既述のように、安藤は移民の矯風対策に手をやき、前年より美山の努力で少しずつ矯風事業は前進していたが、何とか組織的にやりたいという念願をもっていた。更に、美山の努力により、矯風への気運が日本人移民社会の中に少しずつ浸透していた。最後に、各耕地の雇主及び日本人官吏らがそれに協力したことなどがあげられよう。こうした要因が、禁酒会の設立によって、しかも安藤自身が率先して禁酒の模範を示すことによって結実したのである。

特に、美山は、三月にホノルルに到着して以来、共済会本部で、祈祷会、説教会を開く一方、各島の耕地に渡り「敬神ノ要ト修身ノ理ヲ懇諭」し、また、同夫人は「奏楽唱歌ヲ助ケ童幼ヲ教助シ或ハ農民ノ婦女ヲ集会シ之ニ貞順ノ道義ヲ説話スル」等、いそがしくかけまわり、矯風事業の組織化への下地をつくっていた。(91) それゆえ、安藤は外務省報告で、禁酒会が成功した理由として「第一ニハ我宣教師等ガ百折不撓ノ熱心ト第二ニハ当地官民一般ノ賛成トニ

由テ如斯非常ノ奏効ヲ到シ[92]」と述べている。

禁酒会は、初期の日本人移民社会に大きな影響を与えた。それは、何よりも移民の矯風であり、健康回復であり、蓄財であった。

こうして、安藤、美山が、八月七日から、マウイ島巡回に出かけた頃には、禁酒会員が続出し、各地で移民の矯風、衛生、健康上大きな成果があがっていた。[93] まさに、禁酒会の設立は、美山と安藤が打ち込んだ矯風事業の終着点であったといえよう。

(三) リバイバルと日本人教会の設立

ホノルルのリバイバルは、安藤家の女中頭お順（土屋順子）の回心がきっかけとなった。鵜飼の回想によれば、六月二七日夜の祈祷会で司会をしていた彼は、ロマ書一三章一一節（一三節の誤りか――吉田）をテキストに話していたが、つい力がはいって、声に一種の色をつけて「今はねむりより覚むべき時なり」と卓をたたいた。[94] お順は、その時居眠りをしていたが、驚いてわかりましたと椅子から飛び降りて泣いて悔改めた。翌日、お順は安藤夫人のところへ行き、泣いて平伏し「奥さん、申訳ありません。これまでは嘘の御奉公をしていました。仏教信者とは云ひながら上べの御奉公でした。……鵜飼先生から、昨晩、祈祷会で、まだ目がさめないかとテーブルを叩かれたとき、まったく目がさめました。一晩中泣きあかしました。内地以来永らく御奉仕しましたが一たん御暇を頂き、改めて今日からほんとうの御奉公をいたします」といった。[95]

こうして、七月一日に、お順とその夫富蔵が、共済会で受洗した。七月二日より、美山は、連夜祈祷会を始め、三

日に、領事館書記生藤田敏郎、伴新三郎両名が回心し、九日には、領事館にリバイバルがおこり、男女を問わず一〇名全員が回心した。[96]

これら一〇名は、七月一五日に、セントラル・ユニオン教会でおこなわれた合同聖餐式（Union Consecration Service）で、正式に受洗した。合同聖餐式の模様は、ハイドが、アメリカン・ボード（American Board of Commissioners for Foreign Missions）本部に、次のように報告している。[97]

Dr. Beckwith conducted the service. We sang "There is a Fountain", and "Whiter than snow", two hymns that have spread like wildfire among the Japanese Christians. Mr. Harris and myself made brief addresses. Rev. Mr. Miyama administered the rite of baptism after the Japanese Methodist Episcopal ritual, preceded by a brief address from Mr. Ando telling of the new joy that had come into the lives of all at the consulate. There were ten kneeling before the commision table, Mr. Ando at end of the line, his yard-man at the other. Then we partook of the communion in our usual Congregational fashion, Dr. Beckwith and Mr. Harris offering the prayers, Chief Justice Judd and Captain Pierce officiating as deacons. We had a curious commingling of nationalities, as well as of denominational forms, at this union consecration service. Gilbert Islanders, Hawaiians, Chinese, Japanese, English people, all joining in the celebration of the Lord's Supper, in rejoing sympathy with these new beginners in Christian life.

この聖餐式は、美山の伝道のなかで重要な意味をもつ。まず、安藤らは美山より受洗したことである。本来なら、彼らはハリスより受洗すべきであり、また実際、美山はハリスと相談し、洗礼はハリスが授け、後の晩餐式だけを美山がおこなうことになっていた。[98] ところが、彼らは、美山より受洗することを熱望し、その要求は、受け入れられた。[99] 安藤らは、H・E・Aの宣教師からでもなく、ハリスからでもなく、美山から受洗することを望んだのである。つまり、彼らは、外交上の信用や、教派的な意識より、美山のパーソナリティ及びナショナリティを選んだのである。美

山は、回顧で「基督教と云ふものは、ほんとに悔改めれば純な人間にかへるやうにするから、日本に生れた者は、自分は大和民族だと云ふ意識が洗礼の時はつきりしてくるのが当然です。安藤さんがあれだけのいい信者になつた事も此の愛国心から出たことですよ」と述べているが、[100] このことは美山より受洗した人々のキリスト教信仰のあり方を大きく規定しているものと考えられる。次に、聖餐式は、会衆派とメソジスト派の双方の様式を組み入れておこなわれたことである。既述したように、美山の第二回渡航は、M・Eミッションの命を受け、その支部をつくるためであったので、ハイドは憤慨し、危機感をもった。美山の伝道は、H・E・A、すなわち会衆派のテリトリーであるハワイ地域への侵害であった。そこで、ハイドは、M・Eミッションに抗議と要望を含んだ手紙を送った。[101] 抗議とは、H・E・Aの伝道地でM・Eミッションの伝道を何の承諾もなく開始することに対するものであり、要望とは、双方の教派の効果的な協力関係を実現するためのものであり、もし、協力を望むなら、その方法について相談したいのでフォーラーかハリスをハワイに派遣してほしいというものであった。ハリスは、これに対する返事を六月二四日付けで送った。[102] その内容は、美山らが、ハイド、デーモンと、主にある共通の事業をなすために協力を願っており、あくまで教派の違いを拡大したくない、すなわち伝道地争いをしたくないというものであった。こうして、七月八日、ハリスが、M・Eミッションの支部をハワイにつくるためにホノルルに着いた翌日には、クィーン・エンマ・ホールでH・E・A主催の歓迎会が催され、[103] ハリスの意見は受け入れられた。[104]

それ故、七月一五日の聖餐式は、両教派が日本人移民伝道という共通の目的のために、協力関係にはいったことを象徴するできごとであった。更に、聖餐式は、ハワイの人口を構成し、H・E・Aの伝道部門を構成するさまざまな人種、民族が出席していたことである。当時、ハワイには四、五〇〇人あまりの日本人が住んでおり、人数として

も、また、H・E・Aの伝道領域としても、決して過小評価はされていなかったであろうが、この聖餐式で、日本人のクリスチャンが公けにその存在を認められたのであった。

このように、合同聖餐式は重要な意味をもち、以下述べる日本人教会の設立にも大きな影響を与えた。

さて、日本人教会の設立については、安藤の「日記」七月一二日に 'In the fornoon Dr. Harris and Miyama came to talk about the establishment of the Methodist church here.' というのが最初に出てくる記述である。[105] その後、ハリスは、二四日に、H・E・Aと非公式の会合をもち、日本人メソジスト教会の設立について相談した。その内容については不明であるが、その翌日の日付けで、H・E・Aがハリスに送った手紙によって、その一端を伺い知ることができる。[106] すなわち、H・E・Aは、美山を通じてM・Eミッションがはじめた事業を承認し、教派の違いを認め合った上で、美山の伝道に協力するというものであった。結局、H・E・Aのジャッド (Judd) は、日本人メソジスト教会設立の承認と、その準備に自分たちが協力することを決定したのである。[107]

こうして、七月二七日、日本人メソジスト教会は設立され、一八八八年のM・Eミッション年会報告では、[108]「監理M・C・ハリス、牧師美山貫一、巡回伝道師鵜飼猛、伝道師砂本貞吉、[109] 日曜学校長安藤太郎、書記新国千代橘、助手伴新三郎、高杉東作／会員、男二八、女八、子供二、合計三八、仮入会者一四／六カ月間の支出一、二六二・二〇ドル、収入：伝道費一、〇〇〇ドル、他の財源より二六八・一〇ドル、教会への寄付三二ドル、合計一、三〇〇・一〇ドル、差額三七・九〇ドル」とある。八月には、集会は、ウォーターハウス (J. T. Waterhouse) の好意により、[110] 彼の家族の集会用に建てたライシューム (Lyceum) という小会堂を無償で貸してくれるというので、そちらに移転した。教会の運営は、日曜礼拝で美山が説教し、ハイドが聖書研究会をおこない、安藤が日曜学校をおこない、H・コール

マン（H. Coleman）が、毎週水曜に祈祷会をおこなった。しかし、H・E・A宣教師らの協力は、あくまで補助的なものであり、運営は、日本人の手によっておこなわれた。また、共済会、Y・M・C・A、禁酒会は、従来通り続けられ、三谷雅之助、鵜飼、砂本が、各島の巡回をおこなった。美山がサンフランシスコに帰る頃には、一七五名の受洗者（ホノルル五五、コロア三六、コハラ一二、ホノカ七二）があった。[111]

その後、美山は、一八八九年八月二日、鵜飼、安藤辰一とともにサンフランシスコに帰り、三谷雅之助が彼のあとを引き受け、また、美山の代わりとして、長谷川哲之助がサンフランシスコより送られてきた。一八九〇年、サンフランシスコM・Eミッションの総理A・N・フィッシャー（A. N. Fisher）が、ハワイの支部の今後のあり方を検討するために来訪した。一八九一年には、M・Eミッションは突然ハワイより総引き揚げをし、これまでの伝道事業をすべてH・E・Aに譲渡した。この件については別稿で論ずる。その間、ハワイの日本人伝道のために働いた伝道者は、三谷雅之助、佐々木三郎、鏑木五郎、砂本貞吉、和田剣之助、岡部次郎、大塚直太郎、広田善郎、高取次三郎、小早川関次郎、長谷川哲之助、藤田善朗、藤原俊雄、芝染太郎、H村上、S須田などである[112]（ただし岡部は会衆派）。

日本人メソジスト教会は、ハワイ最初の日本人教会であり、その設立の意義は大きい。まず、美山が、前年ハワイに来て以来、多くの人々の協力によって展開してきたキリスト教伝道事業の決算であり、これらの事業の拠点であり、バックボーンである。しかし、それと同時に、教会の設立は、美山の伝道の機能分化をも意味している。すなわち、彼の伝道は、福音会活動を原型としつつ、当初さまざまな機能を有していたが、それが、矯風は禁酒会に、慈善救済は共済会に、教育、文化啓蒙はY・M・C・Aに、福音宣教は教会にというように分解され、各々が特殊な役割を有するようになる。更に、初期の日本人伝道を担った会衆派、メソジスト派両派の協力、提携をあらわすシンボ

ルである。[113]

こうして形成された教会の特色は、第一に、「文明の宗教」として、また教会制度や教理、聖書からキリスト教を受け入れるよりも、倫理的実践を通じて受け入れ、まさにモラルの拠点となった。第二に、教派よりも、リーダーである美山の人格的感化を強く受けていた。すなわち、美山はその頃を回顧して「教会はも少し進んで国民の純な精神を鼓吹することに努めねばならない。教会もそれで盛んになり、国家精神も実行されるのだから大切です。……説教は日曜毎にやりもした。……国のため国の恥と云ふ考へを重に奨励した事を覚へている。その結果は日本人同志の間に友情が高まり互に救済する精神が起つたことでした」と述べているように、[114]〝敬神尊皇愛国〟を説いたため、その信仰共同体は、強い愛国心、同胞愛による絆により結びついていた。[115]第三に、当初はすべて官吏、領事館関係者でそのメンバーが構成され、すなわち有識階層によって運営がおこなわれ、官民一体となって移民対策の一翼を担った。

こうして、美山の第二回渡航の目的であり、初期日本人移民伝道のフィナーレともいうべき、日本人教会は設立され、キリスト教はようやく公けの伝道機関をもち、組織的に、キリスト教を日本人移民社会に伝えていく足がかりをつくった。しかし、教会の設立によって、当初展開された総合的なキリスト教伝道は、機能分化され、福音宣教のみの機能を果たすものに変貌していく。一方、教会の設立は、キリスト教を日本人移民に浸透させる突破口となったが、既述したように、その共同体は日本人としての強いアイデンティティによって支えられており、決してハワイのアメリカ文化への適応を意図しているのではない。むしろ、キリスト教をとり入れることで、ハワイの中でマジョリティの宗教であるキリスト教の中で、日本人のキリスト教の特殊性を顕著にすることになる。

むすび

美山は、前後二回のハワイ渡航で、実際ハワイの伝道事業に携ったのはわずか一年半であった。しかし、その間におこなった美山の伝道は、初期の日本人移民社会に大きく貢献した。

美山がハワイでおこなった伝道事業は、日本人共済会、日本人Y・M・C・A、日本人禁酒会等の設立、そしてそれらの締めくくりとしての日本人教会の設立であった。これらの事業が大きな成果をあげた要因は、第一に、安藤太郎ら領事館及び移民局関係者の協力、アーウィンの協力、各耕地の主だった日本人、宣教師及びプランテーションの雇主などの協力を得られたこと。第二に、仏教、神道などの組織的な伝道がまだ開始されていなかったので、日本の在来宗教による団結した排撃を受けなかったこと。第三に、伝道事業をおこなうにあたって、H・E・Aと違い、美山は日本人であり、日本人移民の背景にある日本社会、文化に対する理解があり、しかも、サンフランシスコの福音会活動を通じて、移民たちの気持ちをよくつかんでいたこと。第四に、移民に、聖書や教理を説くよりも、時宜にかなった倫理的実践を説いたこと。反面、そのことは移民政策を補完することにもなった。第五に、サンフランシスコの福音会及びハワイの慈善会、禁酒会、Y・M・C・Aなど、日本人移民が身近にモデルにできる組織に囲まれていたため、美山のビジョンを日本人社会の中で容易に具体化することができたこと。第六に、国家的精神に立った伝道事業をおこない、移民に「国のため、国の恥」という気持ちを奨励し、〝尊皇愛国〟心を覚醒させることによって、すさんだ移民の心をたち直らせ、日本人としての誇りをもたせることに尽力したことなどである。最後に、こうした伝道事業を推進するエネルギーとなった、美山のキリスト教理解について述べねばなるまい。

美山のキリスト教信仰は、青年期を通じてつちかわれてきた〝尊皇愛国〟の精神、及び彼にキリスト教の感化を与えたギブソン、ハリスの愛国心に影響を受けている。彼にとり、愛国心は、生まれながらの人間の所有物であり、キリスト教は、この愛国心を純化するものである。それ故、キリスト教は国家的精神や民族の抱負と矛盾するのでなく、それを奨励するものであった。

それゆえ、強烈な同胞愛と、同胞への使命感をもつ美山にとって、ハワイでの日本人移民の虐待は、身につまされる思いがし、何とか国家的精神に立って日本人を救わずにはいられなかったのであり、慈善事業はそこに根ざしている。また、ハワイでの日本人移民の懶惰放逸は、〝国の恥〟であり、「聖上」の名にまで傷をつけるものであるから、何とか国家的精神に立ってたち直らせなければならなかったのであり、矯風事業はそこに根ざしており、まさに〝お国のため〟の禁酒であった。更に、虐待されて卑屈になりがちな日本人移民をたち直らせ、日本人としての主体性をもたせるために教育事業は必要であった。こうして、これらの事業の締めくくりとして、日本人教会の設立があった。

このように、美山のキリスト教は、徹頭徹尾〝敬神尊皇愛国〟に根ざしており、彼の伝道事業もこの精神に支えられている。そうして、この〝敬神尊皇愛国〟こそ美山のキリスト教理解の特色であり、彼の伝道事業の成功の秘訣であった。

ハワイにおいて美山が展開した伝道は、この精神に立脚し、福音会を伝道活動の原型としつつ、ハワイの特殊状況のなかで、より成熟した、また完成されたものとしてあらわしたものといえよう。

こうして展開された、美山のキリスト教伝道の初期日本人移民社会における意義は、次のとおりである。

第一に、共済会を通じて、十分な施設のない初期の移民社会にあって多くの窮民、病人を救済し、また、日本人どうしが助け合う〝共助〟の精神を養うのに貢献した。

第二に、禁酒会をはじめ、矯風事業を通じて飲酒、博奕、売淫などの風紀紊乱を矯正することによって、移民の道徳意識、勤勉、衛生、健康回復、貯蓄の推進に貢献した。ひいては低迷していた移民政策をも推進した。

第三に、低迷していた日本人伝道を打開し、ハワイにおいてはまれな二教派の協力関係の中で、最初の日本人教会を建て、その後の福音宣教の拠点として大きな礎石をつくった。特にH・E・Aがまったく手がけていない各耕地で働く移民労働者をキリスト教に導いたことは画期的である。日本国内でも、農村伝道は低迷しており、困難であるのに、外国の地で、定住性のない農村からの出稼ぎ移民にキリスト教を伝えることはひじょうに根気がいることであり、こうした移民への伝道を開始したことは、日本人移民伝道にとって大きな進歩であったといえよう。

第四に、ハワイに以前からあった慈善会、Y・M・C・A、禁酒会など、アメリカの施設、様式を日本人移民社会にとり入れるなど、アメリカ文化をとり入れる端緒となった。

第五に、移民に、日本人としての自覚をもたせ、ハワイの社会に受け入れられる素地をつくった。

しかし、美山の伝道は、従来からよく指摘されているような、キリスト教の布教＝アメリカ文化への適合（アメリカナイゼーション）の媒体、として単純化できない要素がある。たしかに、美山は伝道の一環としてアメリカの諸制度（例、慈善・矯風・教育）を日本人社会にとり入れ、H・E・Aとある程度まで協調関係をもつことによって、一方で、日本人社会にキリスト教、アメリカ文化を受容させる糸口を開き、他方、ハワイ社会に日本人を受け入れさせる基礎をつくった。しかし、美山の伝道内容をよく検討してみると、彼は、あくまで愛国心の鼓舞につとめ、日本人と

して、の、主、体、性、を確立することに尽力し、そのために〝日本人として外国人の前で恥じない〟日本人に変えることによって、〝日本人として〟実質的なハワイ社会よりの信用を獲得しようとしたのである。それゆえキリスト教によって、アメリカ文化を日本人社会に浸透させようとするような方向性は読みとれない。それは、美山の伝道の総括としての日本人教会の設立に顕著に示されている。すなわち、この教会は、日本人による、日本人のための教会であり、ハオレ（白人）が支配し、アメリカ文化、キリスト教がマジョリティであるハワイにおいて、日本人としてのアイデンティティを保持していくために重要な意味をもっていたのである。つまり、美山によってハワイの日本人社会にもたらされたキリスト教は、彼の伝道内容をみる限りでは日本人移民がハワイにもちこんだ日本人のエスニカルな伝統的価値観とはまったく異質なものとして緊張関係をもち、その価値観にある種の変改（コンバージョン）を迫るものとして伝播されたのではなく、その独自性を保持し、むしろそれを〝尊皇愛国〟の名の下に統合し、覚醒させるものであったといえよう。(116)

既述したように、キリスト教の伝道は、単に福音の拡散、伝達のみをおこなうのではなく、諸種の文化的活動を通じて、キリスト教が形成された地盤としての西洋文化、アメリカ文化をも伝え、それにより、他方の社会、文化過程に変改（コンバージョン）を与えるものである。ところが、美山の伝道は、日本人社会にアメリカのすぐれた制度文化を導入し、日本人移民の生活過程に、共済、禁酒（矯風）、勤勉、貯蓄などの考え方をもちこんだが、それによって、日本人のエスニカルな価値観を変改するのでなく、それを補強しようとしたのであり、あくまで、いわゆる〝和魂洋才〟に象徴されるようなアンビバレンスを基調とするものであったといえよう。

こうした美山の伝道成果は、一八九一年以降、同志社を中心に、ハワイ移民伝道のために派遣されていく伝道者た

ちの伝道方針に、ひいては、キリスト教がマジョリティであるハワイ社会における、異文化の集団としての日本人社会のあり方に微妙に影響していく。

最後に、美山の伝道は、ハワイだけでなく、日本国内にも大きな影響を与えたことについて述べたい。周知のように、安藤は、一八八九年一〇月二三日に、美山は、一八九〇年一〇月四日に帰国するが、安藤は、ハワイにいた頃より、禁酒事業の本国への移入を考えており、事実、彼は日本に帰ったのち、美山とともに禁酒事業に専念し、まず、東京禁酒会を組織し、続いて日本禁酒同盟会を組織し、その会長になるとともに、その機関誌『国の光』を発行し、私産を投じてその進歩発展を計った。一方、彼は、一九一七年に安藤記念教会を建て、福音伝道にも努力した。[117]

また、美山も帰国した後に、安藤に協力して、禁酒事業を推進するとともに、一八九六年より、鎌倉伝道を開始し、鎌倉教会を設立した。[118]

このように、美山の日本人移民伝道は、初期のハワイ日本人社会に、ひいては、日本の社会に大きな影響を与えた。そのことは、これ以降のハワイ伝道の検討に、大きな示唆を与えるものといえよう。

さて、次の課題は、第一に、美山の伝道は、ホノルルを拠点になされたが、各耕地の移民労働者のただ中でなされた伝道は、どのようなものであったか。第二に、仏教が伝道を開始することによって、日本人移民社会はそれにどのような影響を受けまた、キリスト教伝道にどのような影響を与えたか。第三に、一八九一年のM・Eミッションの総引き揚げが、日本人移民伝道にどのような影響を与えたか、などであり、これらについては、別稿で論じたい。

H・E・A関係の資料は Hawaiian and Pacific Collection, Hamilton Library, University of Hawaii 及び The Hawaiian Misson Children's Society Library, メソジスト関係の資料は、青山学院大学間島記念館、外交資料関係は、外務省外交資料館、安藤太

郎の日記は、安藤記念教会、それぞれの御厚意により閲覧させていただいた。また文献収集に際して、田村すなお氏、中野次郎氏、松井正人氏、ヤスト・カイハラ氏、テルオ・カワタ氏、マリー・クラモト氏、高橋信彦氏、鎌倉教会などの協力を得た。厚く謝意を表したい。

(1) 拙稿「ハワイアン・ボードの初期日本人移民伝道」(『キリスト教社会問題研究』三〇号、一九八二、二) 参照。

(2) 一三四ページ。

(3) 二二五—二二六ページ。

(4) 参考のために、美山について記述のみられる文献を紹介する。財団法人開国百年記念文化事業会編『日米文化交渉史5—移住編』(洋々社、一九五五)、木原隆吉『布哇日本人史』(文成社、一九三五)、森田栄『布哇日本人発展史』(秀共会、一九一五)、川添樫風『移植樹の花開く』(布哇日本人連合協会、一九六〇)、Albertine Loomis "To all People" (the Hawaii Conference of the United Church of Christ, 1970), Dennis M. Ogawa "Kodomo no tame ni, For the sake of the children" (Univ. Hawaii Press, 1978), Hilary Conroy "The Japanese Frontier in Hawaii 1868-1898" (Arno Press, 1978), Harris Memorial Methodist Church "75th Anniversary" (1963), Harris United Methodist Church "88th Anniversary" (1976).

(5) 生いたちについては『其時代』、『日本メソジスト時報』(二三〇七号、一九三六年八月一四日)、『移植樹の花開く』(前掲)、"Tiding from Japan" (vol. 5, No. 4, April 1902. pp. 43-45) など参照。

(6) 『其時代』八七ページによれば、当時、姓名の変更は比較的自由であった。また、三山を美山と書くのは誤りであるが、人がそう書くから、彼(美山)自身は容認していたという。

(7) 『其時代』一一五ページ。

(8) 生いたちで用いた文献(注5)ではトーマス・カクラン(Thomas Cochran)となっているが、この時代には存在しないので、G・カクランの誤りであろう。

(9) 同　一一六ページ。

(10) 同　一一七ページ。

(11) 同　一二三ページ。

(12) "Tiding" ibid.

(13) 北加基督教々会同盟『開教八十年史』(一九五七)一四—一五ページ。

(14) 『其時代』一二五ページ。尚、福音会の記録については、カリフォルニア大学ロサンゼルス校(U・C・L・A)のResearch Libraryに、『福音会沿革史料』というタイトルで、一八八一年から一八九七年までの記録が保管されている。

(15) 『七一雑報』一八八〇年一月三〇日。
(16) 『七一雑報』一八八〇年九月二四日、同　一八八一年八月二六日、同　一八八二年二月二七日、『福音新報』一八八五年七月一日など参照。
(17) 『基督教新聞』一八八五年四月一日、『福音新報』一八八五年七月一日参照。
(18) 分裂については、前掲『開教八十年史』参照。
(19) 『基督教新聞』一八八五年四月一日、『銀座教会九十年史』(一九八一)三五―四一ページ参照。尚この福音会は後に煉瓦中通り竹川町に移転し、銀座教会の母胎となる。
(20) 『其時代』一六八―一六九ページによれば、青山豊は、一八六五年七月六日生まれ、父は青山昇三郎牧師、豊は、築地四二番の新栄女学校を卒業し、母校で教師をしていた。
(21) 『ハワイ日本人移民史』及び『日本外交文書』一八八五―一八八八年(NO・一八―二一)参照。
(22) 『ハワイ日本人移民史』一一一―一一三ページ参照。
(23) "The Friend"(vol. 45, No. 12, December 1887)"Among the Japanese on Hawaii and Maui."
(24) 『安藤太郎文集』二一四ページ。尚、安藤太郎は、一八四六年四月八日、旧鳥羽藩士で蘭医であった文澤の長男として、江戸四谷に生れる。少時に、江戸で安井息軒に漢学を、村田蔵六より蘭学と兵学を学ぶ。榎本武揚とは親分子分で、戊辰役で榎本とともに五稜閣に立籠る。一八七一年より、大蔵省に出仕、次に外務省の文書大佑となる。同年、岩倉大使に従って欧米を巡行。一八七三年、香港領事として赴任。一八八六年、ハワイの総領事として赴任。帰国後、禁酒事業に専念する一方、外務省通商局長、農商務省商工局長を歴任。一九二四年一〇月二七日歿(『安藤太郎昇天記念』、『其時代』参照)。
(25) 『日本外交文書』第二一巻、四〇〇―四一一ページ、付属書「在布哇移住民事件ニ関シ一般ニ改良ヲ要スルノ趣意書」(一八八八年五月七日、安藤総領事ヨリ大隈外務大臣宛)及び、『安藤太郎文集』二一四ページ参照。
(26) 同、四一九―四二三ページ、公第三六号付記付属書「在布哇日本移住民ノ間ニ基督教誘導ノ始末」(一八八八年七月二一日、安藤総領事ヨリ青木外務次官宛)。
(27) 青木については、まだ名前すらもわかっていないが、ハワイで日本人として日本人移民にキリスト教伝道を開始した最初の人物であると思えるので、少し紹介しておきたい。青木の名前について、Kenjiro Aoki (Albertine Loomis, "To all People—A History of the Hawaiian Conference of the United Church of Christ" (Honolulu, 1970. p. 251) という説と、Shinichi Aoki (Harold Winfield Kent, "Dr. Hyde and Mr. Stevenson" p. 114) という説及び青木新九郎(『基督教新聞』一四六号、一八八六年五月一三日)などの説が

ある。しかし、外務省外交史料館所蔵の『日本人民布哇国へ出稼一件出稼人名簿ノ部 第一巻』では、第一回「官約」移民名簿の中に、青木健次郎及び青木新九郎という名があるが、シンイチの名は見当たらない。それゆえ、健二郎か新九郎のいずれかであるが、現段階では、双方のうちどちらかを決定する資料は発見されていない。現段階で、"The Friend" その他の資料を総合すると、青木は、日本のある牧師の甥であり、(同志社)神学生であり、R・W・アーウィン(R. W. Irwin)ハワイ公使によってハワイへ第一回「官約移民」といっしょに連れてこられた。その目的は、ハワイ在住の日本人移民に対してキリスト教事業を開始するためであった。青木は、ハイドの通訳として、またアシスタントとして尽力し、一八八七年四月一二日、神学教育を再開するために、サンフランシスコに渡った。その際、彼がもっていた二〇〇冊にものぼる日本語の本を、日本人伝道のために寄付したという。

(28) 『基督教新聞』二三〇号、一八八七年一二月二一日、『外交文書』第二一巻、四一九―四二三ページ、公第三十六号付記付属書「在布哇日本移住民ノ間ニ基督教誘導ノ始末」(一八八八年七月二一日、安藤総領事ヨリ青木外務次官宛)、"The Gospel in all Lands" (November 1889, p. 515) など参照。ただし、安藤はH・E・Aの伝道のためにいろいろ援助するが、彼自身は「耶蘇嫌ら」であり、宣教師より宗教の勤めなどにあずかるのは悪寒の出るほど嫌であった(『安藤太郎氏昇天記念』前掲、五〇ページ)。

(29) 前掲「在布哇日本移住民ノ間ニ基督教誘導ノ始末」。

(30) "Dr. Hyde and Mr. Stevenson" p. 114.

(31) "The Friend" (vol. 46, No. 8, August 1888) 'The M. E. Japanese Mission'. "The Friend" (vol. 46, No. 12, December 1888) 'The Japanese Mission'.

(32) 第一回―一八八七年九月三〇日より、六五日間滞在、第二回―一八八八年三月一六日より五〇五日間滞在。

(33) 『メソディスト布哇開教参拾五年』(前掲) 六―七ページ。尚この部分は美山のはなしを編集したものである。

(34) 『基督教新聞』二二九号、一八八七年一二月一四日。

(35) "The Friend" (vol. 46, No. 8, August 1888) 'The M. E. Japanese Mission.'

(36) 『其時代』二〇九ページ。

(37) 『其時代』二一三ページ。

(38) 『メソディスト布哇開教参拾五年』一〇ページ。

(39) 『其時代』二二四ページ。

(40) 『基督教新聞』二三〇号、一八八七年一二月二一日。

(41) 『日本外交文書』(前掲、一八八八年七月一日) 四二二ページ。

(42) 'Letter Hyde to Smith,' October 20, 1887 ("Dr. Hyde

and Mr. Stevenson" p. 115)

(43) ibid.

(44) 「外交文書」、機密信第四二号「在布哇難民救助ノ為日本人共済会設立ノ件」(一八八七年一〇月二〇日、安藤総領事ヨリ外務大臣伊藤宛、外務省外交史料館所蔵)。

(45) 『安藤太郎文集』二一五ページ。

(46) 「外交文書」、公第五四号「在布哇日本人共済会創立ノ顚末」(一八八七年一〇月二〇日、安藤総領事ヨリ外務次官青木宛、外務省外交史料館所蔵)。

(47) "The Friend" (vol. 46, No. 5, May 1888) 'Report of the Japanese Department of Work in Queen Emma Hall.'

(48) 「在布哇日本移住民ノ間ニ基督教誘導ノ始末」前掲。

(49) 「在布哇日本人共済会創立ノ顚末」前掲によると、デーモン、ハイドは、寄付をしている。

(50) 'Letter Hyde to Smith,' October 20, 1887 ("Dr. Hyde and Mr. Stevenson" p. 115), また、本部はクィーン・エンマ・ホールにあった。

(51) 「在布哇難民救助ノ為日本人共済会設立ノ件」前掲。

(52) 『日本外交文書』第二二巻五一八—五二〇ページ「在布哇日本人共済会年会執行ノ儀ニ付上申ノ件」(一八八九年一月一四日、安藤総領事ヨリ青木外務次官宛)。

(53) 同　五三六—五三七ページ「在布哇日本人共済会付属病院設立ノ為寄付金募集方着手ノ旨報告ノ件」(一八八九年九月一六日、安藤総領事ヨリ大隈外務大臣宛)。

(54) "Daily Bulletin", October 26, 1887. 'Japanese Y. M. C. A. Monthly Meeting' によれば、日本人のスタッフは次のようになっている。

Treasurer, K. Nakayama ; Secretary, M. Hibino ; Committee on Religious meetings, S. Ando, T. Takechi, G. O'-uchi ; Educational, M. Hibino, C. Niikuni, Shirabata ; Finance, K. Nakayama, Wakuwa, Shimazaki ; Literary and social, T. Torii, Dr. Iwai, T. Fujita.

(55) 「外交文書」、公第五六号「日本青年基督教会設立ノ件」(一八八七年一〇月二〇日、安藤総領事ヨリ青木外務次官宛、外務省外交史料館所蔵)。

(56) "The Friend" (vol. 45, No. 4, November 1887 'The Japanese Y. M. C. A'.

(57) ibid.

(58) "Daily Bulletin" (May 7,1888) 'Japanese Y. M. C. A.'

(59) "The Friend" (May 1888) ibid.

(60) 『其時代』二九三ページ参照。尚美山は、第二回ハワイ渡航において、より露骨な形で、H・E・Aとの間に壁をつくっていく。

(61) "The Friend" (vol. 45, No. 12, December 1887) ibid.

尚この邦語訳が、『基督教新聞』一八八八年三月四日、及び一八八八年三月二一日に連載されている。

(62) 『其時代』二三五ページ。

(63) 外交文書、公第七二号「山口県人牧師美山貫一各耕地巡回之件」(一八八七年一二月一〇日、安藤総領事ヨリ青木外務次官宛、外務省外交史料館所蔵)。

(64) 『安藤太郎文集』二一五ページ。

(65) 「日記」一一月一七日(安藤記念教会所蔵)。

(66) 「在布哇日本移住民ノ間ニ基督教誘導ノ始末」前掲。

(67) "The Friend" (vol. 46, No. 1, January 1888), "Dialy Bulletin"(December 12, 1887)'Address by Rev. K.Miyama'.

(68) "The Friend" (vol. 46, No. 1, January 1888).

(69) 『基督教新聞』二四七号、一八八八年四月一六日。尚伝道会社の会長は美山貫一、書記大沢栄三、会計安孫子久太郎であった。

(70) "The Friend" (vol. 46, No. 3, March 1888) 'Our Japanese Missionary'.

(71) 上記の "The Friend" (March, 1888)は、清水を次のように紹介している。

Mr. Shimidzu is now about twenty five years old. He was boan in the northern part of Japan and came when he entered the Naval Technical College of that city as a student, and after a course of study covering some five years graduated from this institution. A long and serious illness compelled him to desist from further studies in Japan, and ultimately left to important changes in his life. He was abvised to visit the United States, and there studys ship-building. About the earnest efforts of our friend, Rev. Mr. Miyama, he was brought under the beneficial influences of the Methodist Mission and in time became an earnest and devoted Christian.

He has resided in San Francisco, supporting himself by the work of his hands and engaging as opportunity offered in earnest Christian work.

尚清水は二月八日にホノルルに到着した(安藤の『日記』)。

(72) ibid, 尚清水の給与は、セントラル・ユニオン・チャーチより七五ドル支払われ、旅費もそこから出された。("Annual Report of the Hawaiian Evangelical Association" 1888)

(73) 「在布哇日本移住民ノ間ニ基督教誘導ノ始末」前掲。

(74) "The Friend" (vol. 46, No. 8, August 1888) 'The Japanese Mission in Honolulu'.

(75) 「在布哇日本移住民ノ間ニ基督教誘導ノ始末」前掲。すでに、ハワイ政府は、第一回「官約移民」が到着した頃よ

り、「而シテ当国司法卿ニューマン氏ハ米国桑港ニアル我人民ノ福音会ニ模シ本邦人民ノ当府ニアルモノヲ教育スル目的ナルヨシ而シテ其維持法等ハ当今企画中ニ在リト聞リ」のように福音会に注目していた（『外交文書』第一八巻（一八八五年二月八日）四九五ページ、「布哇移住民ノ渡航状況ニ関シ報告ノ件」）。

(76) 「在布哇我移住民事件ニ関シ一般ニ改良ヲ要スルノ趣意書」前掲、及び『安藤太郎氏昇天記念』五一ページ。

(77) "The Friend" (December 1887) ibid.

(78) "The Friend" (August 1888) 'The Japanese Mission in Honolulu', 尚安藤の『日記』によれば、ハリス、美山らと安藤との間で、四回にわたって手紙のやりとりがなされている。

(79) 鵜飼は、一八七〇年島根県に生まれる。東京で学び、一八八五年、サンフランシスコに渡る。一八八六年四月一一日、F・J・マスタースより受洗（M・E・M）一八八八年三月、美山とともにハワイへ行き、日本人伝道をおこなう。一八八九年八月、サンフランシスコに帰る。九月に、シンプソン大学入学、一八九四年卒業。その秋、按手礼を受け、日本に帰る。一八九五年、青山第一教会の牧師となり、一八九六年より、銀座教会牧師となる。（"The Japan Evangelist" May 1913, pp. 241-242)

(80) アーウィンは、美山が、六カ月間ハワイの日本人に対して事業をおこなうため、千ドル提供した。('Letter Hyde and Bishop to the Rev. C. H. Fowler', March 27, 1888, owned by The Hawaiian Mission Children's Society Library)

(81) 'Letter Hyde to Smith', March 26, 1888 ("Dr. Hyde and Mr. Stevenson" p. 116).

(82) ibid. 'He (Miyama) was not invited to return by the Hawaiian Board, nor by Mr. Damon, or myself.....It was presumptous in Bishop Fowler to begin a M. E. Mission here.....It might answer in the United States where all are on an equality. But here we are to help in any such work and it cannot be done without our help'.

(83) 安藤の「日記」によれば、ハイド、デーモンは美山に抗議している。
March 24 '.....The arrival of Miyama alarmed the Hawaiian Board for fear of his newly establishing a Methodist church in these Islands, and some discussion took place Damon Hyde and himself'.
March 27 '..... Afternoon Damon and Hyde came complaining of the instruction of Bishop Fowler to Miyama with his intention of establishing a Methodist church in these islands.'

(84) 『基督教新聞』一八八八年一二月一二日。

(85) 「在布哇日本移住民ノ間ニ基督教誘導ノ始末」前掲。

(86) 禁酒事業に先立つ、安藤の禁酒については、周知のように「酒樽割り事件」があるが、ここでは省略する。『安藤太郎文集』二一五―二二四ページ及び、『其時代』二四三―二五二ページ参照。

(87) 安藤の『日記』四月四日。

'After Dinner went to Miyama to attend the prayer meeting and happened to start the Temperance Society through the influence of a thanking letter from Mrs. Yajima, president of the female reform association 矯風会 at Tokyo'.

(88) 『在布哇日本人禁酒会概況』六―七ページ。

(89) 同、一八―一九ページ、大日本禁酒会規則

第一条　名称

本会を名けて大日本禁酒会と称する事

第二条　目的

本会の目的は別紙安藤太郎氏の趣意書と名誉同盟者の誓約書とに基き禁酒の主義を一身よりして洽く公衆に及ぼす事

第三条　会員

何人にても本会の趣意目的を賛成して生涯禁酒の盟約を為す者は本会々員たる事を得る事

第四条　役員

本会の役員は会頭副会頭及書記一名たる事

第五条　集会

本会の集会を分て奨励会及事務会の二となす事

一　奨励会は少くとも毎月一回会員相集りて懇談奨励する事

一　事務会は一年に一回大集会を開き本会の事務を協議整理する事

第六条

本会々員は青白の絹紐を以て禁酒の徽章をなす可き事

明治二十一年四月

(90) 『日本外交文書』第二二巻、五二四―五二五ページ、公第一七号「在布哇移住民取締方法中禁酒ノ件」(一八八九年二月二八日、安藤総領事ヨリ青木外務次官宛)。

(91) 「在布哇日本移住民ノ間ニ基督教誘導ノ始末」前掲。

(92) 「在布哇移住民取締方法中禁酒ノ件」前掲。

(93) 『日本外交文書』第二一巻、四三五―四四一ページ、付属書「馬維島各耕地巡視民況報告」(一八八八年九月二一日、安藤総領事ヨリ青木外務次官宛)。

(94) 『其時代』二七二―二七三ページ。

(95) 同、二七三―二七四ページ。

(96) 安藤の「日記」及び『基督教新聞』一八八八年九月一二日参照。

(97) "Missionary Herald" 1888, p. 464.

(98) 『其時代』二九二ページ。
(99) "The Friend" (August 1888) 'The Japanese Mission in Honolulu.'
(100) 『其時代』二九三ページ。
(101) 'Letter Hyde and Bishop to Fowler', March 27, 1888 (owned by The Hawaiian Mission Children's Society Library).
(102) 'Letter Harris to Judd', June 24, 1888 ("The Friend" ibid 'The Japanese Mission in Honolulu').
(103) "Daily Bulletin"(July 16, 1888) 'Reception of Rev. Mr. Harris'.
(104) 一八八八年六月に開かれた年会では、すでに両者の協力への希望が述べられている。("Annual Report of the Hawaiian Evangelical Association" 1888, p. 13).
(105) 安藤の『日記』七月一二日。
(106) 'Letter Hyde, Bishop and Beckwith to Harris, July 25, 1888 ("The Friend" ibid 'The Japanese Mission in Honolulu').
(107) 'Brief report of the Japanese Mission, Honolulu H. I. July 1889, Miyama to president of the Hawaiian Board' (owned by The Hawaiian Mission Children's Society Library).
(108) "Annual Roport of the Missionary Society of the Methodist Episcopal Church" 1888, p. 406.
(109) 砂本は、一八五六年、広島に生まれる。一八八〇年、サンフランシスコに渡り、福音会に入る。美山の感化でキリスト教に入信、翌年五月七日、ギブソンより受洗。一八八七年、帰国して広島で集会所を開く、また、南メソジスト派の宣教師J・W・ランバスの助力を得て、女子教育をはじめる。(現在の広島女学院) 一八八八年五月二六日、ハワイに伝道。翌年一〇月、帰国し、各地を伝道。一九三八年五月七日歿。
(110) 『其時代』三〇〇ページには、彼は、「ウェセリアン派」の定住伝道師で、英国人の富豪とある。
(111) 'Brief Roport of the Japanese Mission,' ibid.
(112) 『布哇伝道三十年略史』四—五ページ。
(113) H・E・Aの一八八九年年会報告は次のように述べている ("Annual Report of the Hawaiian Evangelical Association" 1889,) 'The Japanese work, under the auspices of the Methodist Church, is one with which we cooperate.'
(114) 『其時代』二九四ページ。
(115) "The Friend" (August 1888) 'The Japanese Mission in Honolulu,' 'There is intense national feeling, something deeper and more far reaching than patriotism, the sense of personal obligation to do what only Japanese can do in carrying the knowledge of the Gospel to all the Japanese.'

(116) ここで用いるエスニカルの意味は、習慣、言語が共通でかつ祖先が共同であるという信念にもとづいている集団ということである。

(117) 安藤太郎は、一九二四年一〇月二七日歿。文子は一九一五年歿。

(118) 美山貫一は、一九三六年七月二九日歿。豊子は、一九一四年五月六日歿。